鹿児島大学法文学部紀要
「人文学科論集」第66号（二〇〇七）別刷
二〇〇七年七月発行

個物の永遠性

―スピノザの「第三種の認識」にかんする考察―

柴田健志

個物の永遠性

―スピノザの「第三種の認識」にかんする考察―

柴田健志

はじめに

個物の永遠性の認識、それが「第三種の認識」と呼ばれる認識の意味である。私は、この論文で、「第三種の認識」を理解することがスピノザ解釈において最も重要な課題であるという前提にたって、この課題が提起する問題点を細部にわたって考察するつもりである。まずはじめに、「第三種の認識」が哲学史的にみてどのような位置にあるかを俯瞰することから始めて、考察すべき問題点を整理しておくべきであろう。

スピノザは『エチカ』第二部定理四十注解二で、認識を三種類に分類している。すなわち、

第一種の認識（表象）

第二種の認識（共通概念による認識）

第三種の認識（直観知）

この分類の意味をどう理解するかはスピノザ解釈の重要な論点のひとつであるが、スピノザ自身がこの三種類を二つに区切って考えていることは明らかである。スピノザは区別の基準をいくつか用いているが、ここでは持続／永遠という基準に着目してみよう。『エチカ』によれば、第一種とは事物を「持続」の相のもとに認識することであり、それに対して第二種と第三種は事物を「永遠」の相のもとに認識することである。「永遠」の相のもとに認識される事物とは、ひとつは「普遍」であり、もうひとつが「個物の本質」である。これらがそれぞれ第二種、第三種の認識の対象なのである(一)。

ところで、「普遍」が「永遠」の相において認識されるという考えは、すでにプラトンのイデア論にある。伝統的に、時間的に変化しない本質的なものとされるのは「普遍」であって、「個物」ではない。スピノザの同時代をみても、この伝統はたやすく確認することができる。ライプニッツによる「必然真理」ないし「永遠真理」と現実存在する事物にかかわる「偶然真理」の区別はこの伝統を踏襲しているし(二)、伝統的に「永遠真理」とみなされてきた数学的真理を、神によって創造された「偶然真理」と考えたデカルトさえ、現実存在する事物にかんする真理といわゆる「永遠真理」の区別は認めている(三)。したがって、スピノザの哲学の哲学史上の特異性は、時間のなかに現実存在する「個物」を、「永遠」の相において認識するという、第三種の認識において最も明瞭に現れているといわねばならない(四)。

この点を踏まえつつ、あらためて問うてみよう。――第三種の認識とはどのような認識なのであろうか。スピノザはそれを次のように定式化している。

「神のいくつかの属性の形相的本質の十全な観念から、諸事物の本質の十全な認識へ進む」。

この定式は『エチカ』第二部定理四十注解二に現れ、ほぼ同じ形で第五部定理二五証明に使われているのであるが（定理二五証明では定理四十注解に含まれる「形相的本質」という言葉が省略されている）、この定式をいったいどんなふう

に理解すればよいのであろうか。私はこの問題を二つの側面から考察すべきだと思う。ひとつは存在論的な側面である。第三種の認識は、どのような存在論を前提しているのだろうか。言い換えれば、神の属性から個物の本質へ進みうるには、この両者はどのような関係になければならないのであろうか。スピノザの存在論には、本質と現実存在の関係についての広く共有された理解をはるかに逸脱する局面が含まれている。十七世紀の文脈のなかだけでもこの点は指摘できる。デカルトもライプニッツも、本質を可能性の領域として扱うことで、本質と現実存在を区別したのであるが、スピノザにはこのような区別はみられないのである。このことの意味を明確にしない限り、第三種の認識を正確に理解することはおそらく困難であろう。したがって、私はこの論文をスピノザの存在論の理解に挑むことから始める。

もうひとつの側面は知識論的な側面である。神の属性から個物の本質へ「進む」と言い表される認識作用は、どういったタイプの認識作用として理解すべきなのだろうか。じつは、スピノザの知識論においてはすべての真理を必然真理とみなすという法外な想定がなされている。いうまでもなく、第三種の認識はこの想定と深く結びついている。それゆえ、この想定を検討しなければならない。

この二側面から第三種の認識の定式の意味を考察した上で、次に第三種の認識そのものが取り扱われいるテキストを考察しなければならない。第三種の認識は『エチカ』第五部定理二一以下の主題となっているのだが、スピノザはまず第三種の認識を遂行する主体が個々の人間の魂である点を証明した上で、第三種の認識がそれら魂にもたらす効果を論述している。スピノザ自身は、第三種の認識の効果を魂の永遠性の享受という宗教的な至高の経験として語っている。スピノザ自身の意図は疑いなくここにあったであろう。しかし、どのような意味においてであろうか。この点を明確にする必要がある。私が提出する解釈によれば、個物の現実存在を一種の必然真理として認識することが「第三種の認識」であり、それが至高の経験である理由は、われわれが自己自身の現実存在を偶然性の地平から解放し、絶対的な満足を手に入れるこ

とができるという点に求められている。

一　存在論からみた第三種の認識

第三種の認識とは個物の本質の認識である。ところで個物とは、現実存在するものとしてわれわれに知られるものである。しかし、問題は現実存在でなく本質の認識なのだから、第三種の認識のためには現実存在という地平を離れなければならない。神の属性を認識するということが、まさに現実存在を超越する行為である。第三種の認識とは、そのようにいったん現実存在を離れた地点から個物へと「進む」ような認識なのであろう。――こう考えた途端に、われわれは『エチカ』の読解に失敗すべくすでに運命づけられている。スピノザにおいて、本質と現実存在は対立するものではまったくないからである。『エチカ』第五部定理三十証明を引用しよう。

永遠性とは、神の本質が必然的な現実存在を含む限りにおいて神の本質そのものである（第一部定義八により）。それゆえ事物を永遠の相のもとに概念するということは、事物が神の本質をとおして実在的なものとして概念される限りにおいて、つまりは事物が神の本質をとおして現実存在を含む限りにおいて、それらの事物を概念するということである。

注目すべき点は、事物を永遠の相のもとに概念するということは、「事物が神の本質をとおして現実存在を含む限りにおいて」事物を概念することであると明言されている点である。個物の本質を認識するとは個物を永遠の相のもとに認識す

ることであるが、永遠の相のもとに認識するということは現実存在するものとして（「現実存在を含む限りにおいて」）認識することであるといわれているのである。このように、本質の認識と現実存在の認識はまったく対立してない。本質の認識とは現実存在の認識なのである。ただし、そこには「神の本質をとおして」という条件がついている。いうまでもなく、この条件が重要である。この条件は何を意味するのであろうか。証明の前半に注目しよう。永遠性は神の本質である。神の本質は必然的な現実存在を含むのだから。――このことが『エチカ』第一部定義八を参照する形で、証明の後半部分の前提として指摘されている。スピノザにおいて永遠性とは必然的な現実存在の別名にほかならず、したがって事物を永遠の相のもとに認識するということはその現実存在を必然的なものとして認識するということを意味している。そして事物をそのようにみることができる条件が「神の本質をとおして」と表現されているのである。

もしこの条件がなければ、どうなるであろうか。事物は依然として現実存在するものとして認識されるであろうが、その現実存在は必然性という性質をもたない現実存在にすぎなくなる。すなわち、事物の現実存在は偶然的なものとして認識されるであろう。通常は、われわれは個物の現実存在をこのように理解している。これに対して、必然的に現実存在するということは、それが現実存在しなかった可能性を考えることが不可能であるということを意味している。スピノザにとって、そのようなものとして考えられるのは神だけである。したがってその他の事物の現実存在は、「神の本質をとおして」でなければ、つまりは神の本質たる必然的な現実存在を含む限りにおいてでなければ、必然的なものとして認識されえないことになる。事実、われわれは個物の現実存在を通常は必然的なものとしては考えない。個物は現実存在しないことも可能であるものとして通常は考えられているのである（五）。

このように、スピノザの考えによれば、本質の認識は現実存在の認識と対立していない。むしろ現実存在の認識に二種類あり、現実存在を必然的なものとしてみるか、偶然的なものとしてみるか、という点にこそ対立が存在するのである。

必然的／偶然的というこの対立は、スピノザによってしばしば永遠の相／持続の相という対立に置き換えられているが、どちらの対立においても前者が現実存在の実在的・客観的な側面を、後者が現実存在の抽象的・主観的な側面を言い表していることに注意しなければならない。この点にかんする重要なテキストを二つ引用しよう。まず『エチカ』第二部定理四五注解。

私はここで、現実存在を持続のことと解するのではない。すなわち、抽象的に概念される限りでの現実存在、また一種の量として概念される現実存在のことと解するのではない。なぜなら、私は、神の本性の必然性によって無限のものが無限の仕方で帰結する（第一部定理十六を見よ）という理由から個物に帰属させられるところの現実存在の本性そのものについて語っているのだから。

ここでは、現実存在が持続／必然性という二側面からとらえられており、かつこの二側面が抽象的な概念／本性そのものというふうに意味づけられている。次に『エチカ』第五部定理二九注解である。

諸事物はわれわれから二つの仕方で現実として概念される。われわれは、事物を一定の時と場所との関係で現実存在するものとして概念するか、あるいは神のなかに含まれ神の本性の必然性にしたがって導き出されるものとして理解するのである。ところでこの第二の仕方で真あるいは実在的として概念されるものを、われわれは永遠の相のもとに概念している。

ここでは、神をとおして事物を概念するということが真の認識であり実在的なものの認識である点が明言されている。このことが暗に示しているのは、「事物を一定の時と場所との関係で現実存在するものとして概念する」こと、つまり持続の相のもとに、偶然的なものとして事物を認識することが、虚偽を含みかつ主観的なものにすぎないという点である。

このように、個物の本質を認識するということは、ある個物が現実存在しなかったかもしれないという可能性をうち消すことを不可欠の条件として含んでいる。第三種の認識がいかに途方もない認識であるかということが、ここから明瞭に理解されるであろう。個物の現実存在をこのような仕方で認識するためにまず神の認識が要求されるのはそのゆえである。単独の個物であれ複数の個物であれ、個物のみを視野におさめているかぎり、その現実存在は偶然性という性質を帯びざるをえない。すなわち、個物がいま現実存在しているという事実は、それが現実存在しなかったかもしれないという可能性を含んで認識されるのが普通である。それゆえ、スピノザのように個物の現実存在を必然的と考えるには、個物とは必然的な現実存在を本質とする実体の様態であるとする存在論が必要なのである。そのよく知られた論理を、第三種の認識の前提条件として再認識すべきである。

「実体の本性には現実存在することが属する」(I7pr.)が、「神以外にはいかなる実体もありえず、概念されえない」(I14pr.)。つまり、スピノザの存在論においては、現実存在するとしか考えられえないものは神以外になく、他のすべてのものは神から産出された「様態」にほかならない(I15pr.dem.)。スピノザはここから、神という実体が必然的に現実存在するものであると考えられる以上、そこから産出された諸事物つまりは「様態」もまた必然的に現実存在するものであると考えられるという結論を引き出すのである。『エチカ』第一部定理二九を引用しよう。

諸事物の本性のなかには偶然的なものは何も与えられておらず、すべては定まった仕方で現実存在し作用するように

神の本性の必然性によって決定されている。

このように、諸事物の現実存在は、神によって決定されていると考えられる限り、偶然的なものとは考えられないことが明言されている。さらに『エチカ』第一部定理二三では、神をとおして考える限り、諸事物の現実存在を別の仕方で考えることが不可能であるとされている。

諸事物は現に産出されているのとは異なるいかなる他の仕方、いかなる他の秩序においても、神から産出されることはできなかった。

事物が別の仕方で現実存在した可能性を考えるということは、現にあるがままの事物のあり方を偶然的なものとして考えることである。神のなかで事物を認識する限り、そのようなことはできないとこの定理は述べているのである。これが、第三種の認識の定式が前提している存在論である。「神のいくつかの属性の形相的本質の十全な観念から、諸事物の本質の十全な認識へ進む」という定式の意味は、現実存在するとしか考えられないものすなわち神を認識し、「神をとおして」個物の現実存在を必然的なものとして認識するということにほかならない。

では「神をとおして」個物を認識するというのは、どのような認識作用として理解すべきなのだろうか。この点を考察しなければならない。

二　知識論からみた第三種の認識

スピノザは、『エチカ』第一部定理十六で、「神の本性の必然性から、無限のものが無限の仕方で（つまり無限知性のもとに落ちてくることができるすべてのものが）帰結しなければならない」と述べる。つまり、神の存在が与えられると、そこから無限の事物が必然的に生み出されなければならないというのである。神の属性から事物の本質へ「進む」という第三種の認識の定式は、明らかにこのような事物の産出の過程をなぞるものである。

しかし、そもそも神の存在が与えられるとなぜそこから無限のものが帰結しなければならないというのであろう。『エチカ』第一部定理十七注解では、スピノザは神と事物とのあいだの関係を、数学を引き合いに出して説明している。この注解は、神の本性から無限の事物が出てくるのは、「三角形の本性からその三つの角の和が二直角に等しいということが帰結する」のと同じ必然性によってである、というのである。これは、比喩ではない。同じ注解のなかで、「同一の必然性によって」しかも「同一の仕方で」と鮮明に述べられているからである。三角形の存在からは、その内角の和が二直角に等しいことが帰結せざるをえない。それと同じ必然性によって、神という無限の実体からは無限の事物が帰結しなければならないというのである。

スピノザの哲学のラジカルさは、このように数学的真理と現実存在する事物を同等に扱っている点にある。つまりスピノザにとってすべての真理は必然真理である。そしていうまでもなく、この取り扱いから第三種の認識という破格の認識が導き出されているのである。神の属性の認識から個物の本質の認識へ「進む」といわれるその認識過程は、三角形の認識から内角の和の認識へ進むのと同質の過程なのである。そこで、数学的真理の認識を例にとってこの認識過程の特質を

調べてみよう。

数学的真理を認識する場合、例えば三角形の内角の和が二直角に等しいことを認識する場合、われわれはその対象の必然性を認識していると考えられる。三角形の内角の和が二直角に等しくないとは考えられないのである。では、このような認識をしているとき、われわれの認識作用そのものはどうなっているであろうか。対象を必然的なものとして認識するとき、その認識作用そのものもまた必然的であるといいうるのではなかろうか。三角形を思考しはじめたら、われわれは内角の和が二直角に等しいという性質の認識へと進まざるをえないであろう。すなわち、認識の対象が必然的な性質をもつとき、その認識作用そのものも必然的という性質をもっている。われわれは別の仕方で認識を進めることができないのであるから。

スピノザは認識作用にかんするこのような理解を現実存在全体に拡張するような形而上学を構築した。スピノザによれば、神の無限の属性はすべて同等であり、思惟の属性に生じていることも他の属性に生じていることも、神の同一の活動であると考えられる。「観念の秩序および連鎖は事物の秩序および連鎖と同一である」（II7pr.）。したがって、数学的真理だけでなく、現実存在する事物を認識するときにも、認識対象と認識作用は等しく必然的であることになる。

この定理の意味は、次のように考えればいくぶんか明瞭になるであろう。認識対象と認識作用が同一の活動の二面であるとすれば、認識に先だって事物が現実存在すると考えることはできない。むしろ、事物を認識することと事物を産出することは、同一の行為として考えられなければならないのである。しかも事物の産出過程は三角形からその性質が導き出されるのと「同一の必然性」をもっている。事物を永遠の相のもとに認識するということは、三角形が内角をもつことを認識しないことが不可能であるのと同様の仕方で事物の現実存在を認識するということなのである。

ただし、注意しなければならないことは、いま引用したいわゆる平行論定理において、認識される事物と同一の「秩序

および連結」にしたがって認識する主体は人間の魂でなく神であるという点である。この点は、『エチカ』の演繹的な叙述形式からすでに明らかなことである。というのも、『エチカ』第二部は、「思惟」と「延長」が神の属性であることの証明(III,2pr.)から始まり、そこから人間の魂と身体が演繹された後で、ようやく人間的認識の構造が解明される、という順序で進んでいくのだが、そのなかで人間の魂が登場するのは定理十一になってからだからである。平行論定理と呼ばれる定理七の時点では、まだ人間の魂自体が出てきていない。この点はあまりにも明白であるにもかかわらずしばしば誤解されている。私の意見では、デカルトは心身二元論だがスピノザは心身平行論であるというような言い方をするのがそもそもの誤解のもとであって、というのもデカルトにおいては人間の心身が問題であるのに対して、スピノザの平行論定理では人間など問題になっていないからである。この定理の系を読めば、この定理が人間の認識について述べているものではないことは極めて明瞭に理解できる。

神の思惟する能力は神の活動する現実的能力に等しいということがここから帰結する。すなわち、神の無限の本性から形相的に帰結するすべてのことは、それと同一の秩序、同一の連鎖で神の観念から神の内に表現的に帰結するのである。

神においてはすべての事物が必然真理として認識されているのであるが、問題は人間の魂である。人間の魂は「思惟」の属性における神の様態である。換言すれば、神の知性の一部分である。それなら、神のなかで生じているこの必然的な認識作用は、人間の魂に何らかの関係をもっているはずである。この関係にもとづいて提示される認識、それが第三種の認識である。

三　魂の永遠性

第三種の認識の意義は何なのか。――それが『エチカ』第五部の主題である。この点を『エチカ』第二部定理四七注解は明言している。

第三種の認識については、われわれはこの部〔第二部〕の定理四十注解二において述べた、そしてその優越性と効用についてわれわれが述べる場は、第五部のなかにあるであろう。

第三種の認識の「優越性と効用」にかんする叙述は、「第五部のなか」の定理二一から最後まで続くことになるのだが、私はその一連の叙述を、内容の点で大きく二つに分けて解釈する必要があると思う。定理二一、二二、二三と定理二四以下最後までである。最初の三つの定理では、第三種の認識がまさに個々の人間の魂において遂行されるという点が証明の対象になっている。この点を証明した上で、定理二四からいよいよ第三種の認識の「優越性と効用」にかんする叙述が開始されるのである。このような解釈上の観点から、ここではまずこの三つの定理について述べ、節をあらためて定理二四以下の内容をみていくことにする。したがって以下の考察は、この論文の論述のつながりとしては、一方では右に述べてきた知識論の続きであり、他方ではこの次に述べる第三種の認識の「優越性と効用」の解釈の前提である。

第三種の認識で事物を認識するのは誰か。それが個々の人間の魂であるという点は、じつは『エチカ』第五部まで明らかにされていない。人間の魂は、『エチカ』第二部定理十一から証明のなかに現れる。そして人間の魂が何を認識しうる

かという叙述が、ここから定理四十まで続くことになる。しかし、この一連の定理で扱われているのは、じつは第一種の認識と第二種の認識だけである。定理四十注解二で認識の種類が整理され、「この二種類の認識以外に」としてはじめて第三種の認識の存在が読者に向かって言い渡されるのであるが、個々の人間の魂がこの認識の主体であることの証明は、この時点でまだ与えられてはいない。

個々の人間の魂が主体となる認識の前提は、『エチカ』第二部定理十三である。この定理は、三種類の認識すべてに共通する前提であると解釈できるのだが、そこでは、人間の魂が認識する対象は現実存在する身体以外にないという点が鮮明に述べられている。

人間の魂を構成する観念の対象は身体、すなわち現実に存在するある延長の様態であり、それ以外の何ものでもない。

スピノザはただこれだけの前提から、第一種、第二種の認識を演繹していく。

現実存在する身体は、外部からの作用によってつねに「変様」した状態にあり、かつこの状態は持続を含む。われわれが現実に認識できるのは、つねに身体の「変様」という状態である。自己の身体も(II23pr.)、外部の事物も(II26pr.)、この「変様」を認識することで認識されている。換言すれば、それらは「身体の変様の観念」(II29cor.)として人間の魂に与えられるのである。さらに、この「身体の変様の観念」についてもやはり「観念」があり、そのような観念として「自己」の認識が与えられる(II19pr.)。以上が第一種の認識に属する。

ところが、「身体の変様」のなかにはつねに「すべてのものに共通」(II37pr.)であるようなものが含まれており、その観念がやはり人間の魂のなかにあると考えられる(II38pr.)。それが「共通概念」(II40sc.1)にもとづく第二種の認識である。

これらの認識はともに、人間身体が外部から刺激され「変様」という状態にある限りで人間の魂に与えられるものである。言い換えれば、人間身体が持続を含む限りで与えられるものである。ただし、第二種の認識の対象である「すべてのものに共通」のものは「ある永遠の相のもとに概念される」(II44cor.2dem.)。つまり身体の「変様」という持続するもののなかにあって、それ自体は不変のものである。しかしそれはまさに「すべてのものに共通」であるがゆえに「個物の本質を構成しない」(II37pr.)。

したがって、「人間の魂を構成する観念の対象は身体、すなわち現実に存在するある延長の様態であり、それ以外の何ものでもない」という定理十三を前提におく限り、個物にかんする認識はつねに持続の相のもとになされると考えられるのである。では第三種の認識はこのような条件を否定したところに成立すると考えるべきなのであろうか。そうではない。第三種の認識の主体が個々の人間の魂であるならば、この定理十三を否定することはできない。したがって、定理十三を肯定した上で、身体を持続の相においてでなく永遠の相において認識しうるという点が証明されなければならないのである。この点が『エチカ』第五部定理二一、二二、二三の課題である。

定理二一は、身体の持続についての認識は「表象」つまり第一種の認識にすぎないことをまず確認している。

魂は身体の持続するあいだだけしか事物を表象したり、過去の事物を想起したりすることができない。

これに続く定理二二は「ところが(tamen)」という言葉から始まるように、明らかに定理二一との対照で語られている。

ところが神のなかにはこのまたはあの人間身体の本質を永遠の相のもとに表現する観念が必然的に存在する。

人間の魂は現実に存在する身体の観念から形づくられており、それゆえわれわれは事物を持続の相において認識しているが、われわれでなく神のなかには現実存在している身体の本質（永遠の相のもとに観られた現実存在する身体）についての観念があるというのである。では第三種の認識を遂行するのは神であってわれわれではないというのであろうか。そうではない。次の定理二三は、この定理を受ける形で、人間の魂には永遠なる何かが属するという。証明の一部もあわせてみておこう。

定理　人間の魂は身体とともに完全には破壊されずに、永遠である何か(aliquid)が残る。

証明　神のなかには人間身体の本質を表現する概念ないし観念が必然的に存在する（前定理により）。この概念ないし観念は、このため必然的に人間の魂の本質に属する何か(aliquid)である（第二部定理十三により）。……

この証明のポイントは、証明それ自体が参照を求めている『エチカ』第二部定理十三にある。この定理を前提して、『エチカ』第二部では次のような論述が組み立てられていた。現実存在する身体は、つねに外部からの作用によって「変様」している。そして身体の「変様」は持続を含んでいる。この「変様」の観念をもつのはいうまでもなく当の人間の魂である。第一種の認識はこのようにして生じていると考えられる。しかし、この定理から導き出される個物の認識は第一種の認識だけではない。この定理から第一種の認識が導き出されるのは、人間の魂のみを眼中におき、神を考慮しない限りにおいてである。「人間身体の変様の観念はたんに人間の魂に関係づけられている限り、明晰判明なものではなく混乱したものである」ということが、すでに『エチカ』第二部定理二八で指摘されている。

神を考慮に入れたとき、この定理はむしろわれわれが第三種の認識の主体ともなりうるということの根拠となる。それが定理二三の意味である。この観点から定理二三の証明を理解すべきである。その証明を再構成すると次のようになる。現実存在する身体の本質の観念は神のなかにあると考えられるが、『エチカ』第二部定理十三により、人間の魂は現実存在する身体の観念にほかならないのだから、現実存在する身体について神がもつ永遠なる観念は、人間の魂に属する「何か」であることになる。その限り、人間の魂は身体を持続の相のもとに認識するだけでなく、また永遠の相のもとにおいても認識しうると考えられるのである。つまりは、第三種の認識を遂行するのは個々の人間の魂にほかならない。以上がこの定理で証明されている内容である。そして定理二三の注解では、われわれは現に「われわれが永遠であることを感じかつ経験する」とつけ加えられている。

ただし、この注解に出てくる永遠なるコギトの経験それ自体が第三種の認識であると解釈すべきではない。むしろ、これは第三種の認識を遂行するのが個々の魂であるということの証明であると解釈すべきである(六)。すなわち、われわれが第三種の認識によって事物を認識することができるのは、第三種の認識の主体となる「永遠なる思惟様態」(V.23s.)がわれわれに属しているからであるという点がここで述べられているのである。

四　第三種の認識と魂の永遠性

続いて、第三種の認識で事物を知ると、魂にはどんなことが起こるか、という点をみていかねばならない。スピノザにとって最も重要だったのはこの点である。論述の転回点となる定理二四は「われわれは個物をより多く認識にするにしたがって、それだけ多く神を認識する」となっている。三角形の性質をより多く認識することによって、三角形という図形

のことがより多く理解できるのと同様に、神から産出された事物をより多く認識することは、神をそれだけよく理解できることになる、というわけである。スピノザの論理は明瞭である。ところで、ここでいう「認識」には、第三種の認識だけでなく第二種の認識も含まれていると理解しておくのが適当であろう。

そこで定理二五は次のようにいう。「魂の最高のコナトゥスおよび最高の徳は、事物を第三種の認識によって認識することにある」。第三種の認識が「魂の最高のコナトゥス」であり「最高の徳」であることが明言されている。そして、その「最高のコナトゥス」とは定理二二、二三で証明されたところのわれわれに属する「永遠なる何か」によって行使されるのである。定理二六では、「魂は第三種の認識によって認識することにより多く適するにしたがって、この種の認識そのものによって事物を認識することをそれだけ多く欲望する」という。先の「コナトゥス」が「欲望」と言い換えられている。心身にかんする「コナトゥス」つまり「衝動」が意識を伴うとき、それが「欲望」と呼ばれるからである(III9sc.)。第三種の認識の主体が個別的な魂であるという点が、意識された「衝動」を意味する「欲望」という語の使用によっていっそう明瞭にされている。さらに定理二七では、第三種の認識によってもたらされるのは「魂の最高の満足」であると明言される。「この第三種の認識から、存在しうる限りでの魂の最高の満足が生まれる」。定理三二系にいたって、この「最高の満足」は「神の知的愛」と言い換えられるであろう。定理三三はこの愛が「永遠」であることを、定理三七はこの愛が不滅であることを証明していく。名高い定理三六注解では、この愛が「至福」「自由」「栄光」と等置されているのが見出されるであろう。スピノザが第三種の認識を宗教的な経験と解していた証拠である。そして定理三八は、この第三種の認識と第二種の認識による認識によって「より多くの事物」を知るにしたがって、魂は「それだけ死を恐れることが少ない」と述べている。この点がおそらく第三種の認識の究極の「効用」として述べられているのであろう。

このように、これら一連の定理においては、われわれの魂に属するあの永遠なる「何か」に生じることが、様々なレベ

ルから兄渡され、それがいわば知的に濾過された形で簡潔に論述されている。重要な点は、それらがもはや主観的な経験としては理解されていないという点であろう。たしかに、「知的愛」を享受するのは個々の人間の魂であるが、それは厳密に言えば「人間の魂の本質によって説明されうる限り」(V36p.)における神なのである。人間がもつところの「神への愛」としてまず語られる(V32cor.)この愛は、じつは「神が自己自身を愛する神の愛そのもの」(V36pr.)であると明言されるのである。それゆえ、この経験がもたらすものはもはや主観的な喜びではありえないが、やはり個々の魂が享受する喜びである。「神の知的愛」とスピノザが呼ぶこの経験は、このような特異な位相に置かれている。喜びの真の原因、あるいは愛の真の対象が主観を越えたものであるというだけではない。もしそれだけなら、むしろありふれた主張である。真に重要な点は、「最高の満足」といわれる喜びそのもの、愛そのものが主観を越えて経験されるという点である。第三種の認識において個々の魂の経験する内容ばかりでなく、その経験そのものが主観を越えているという点こそ、スピノザの哲学の重要な特徴であると思われる。平行論定理の最も深遠な帰結は、少なくともスピノザの意図においてはここにあったと解釈しうるのである。すなわち、「神の活動する現実的能力に等しい」(II7cor.)といわれたその「思惟能力」が人間の魂に属する「何か」として経験されるのである。

おわりに

これで、はじめに整理しておいた問題点をひととおり考察し終えたことになる。ひとことでまとめれば、第三種の認識とは個物の現実存在そのものを必然的なものとして認識することである。スピノザにとっては、それが個物を真に認識することである。個物の現実存在を偶然的なものとして認識することは主観的な認識であって、神の存在を無視した勝手な

想像にすぎないということがここに含意されている。そして、第三種の認識によって、われわれの魂は自己自身の永遠性を享受することができると考えられているのである。スピノザが「永遠の相」のもとに観ようとしていたのは、現実存在そのものだったのである。この点はいくら強調してもしすぎることはあるまい。スピノザの哲学の理解は、まさにこの点の理解にかかっていると考えられるからである。

テキストの解釈としては以上が問題なのであるが、スピノザの哲学の哲学史への位置づけという点にかんしてはまだ述べておくべきことがある。

個物の現実存在とその偶然性は、われわれの思考において極めて堅固に結びついており、現実存在を認識するということは即偶然的なものを認識するということになってしまっていると考えるのは私だけではあるまい。むしろ、現実存在にかんするこうした理解はかなり一般的なものであると考えられる。そうでなければ、スピノザの哲学はもっと容易に理解されてきたことであろう。しかし、実際にはそうなっていない。多くの人に、スピノザのいう第三種の認識は、ほとんど不可能なことのようにみえている。フェルディナン・アルキエほど哲学史に造詣の深かった人が、第三種の認識の可能性には懐疑的たらざるをえなかったのである(七)。そこで最後に、哲学史的な観点から、スピノザ哲学の位置づけにかんする若干の見解をつけ加えなければならない。

くり返していえば、第三種の認識がほとんど不可能な認識のごとくみえるという点が明瞭に示しているのは、現実存在の概念と偶然性の概念が不可分であるという理解が、われわれの側でいかに根深いものであるかという点にほかならない。デカルトもライプニッツも、このような理解を決して捨てようとはしなかった。それどころか、それを真たらしめるような形而上学の構築に向かったのである。彼らは、現実存在に可能性としての本質を先行させることで、現実存在に偶然性

という性質を結びつけたのである。ついでにいえば、「現実存在は本質に先行する」というサルトルの実存主義の定式は、サルトル自身がいうように、デカルトやライプニッツの形而上学を逆さにしたものであるが(八)、そのことによって現実存在の偶然性がより先鋭化されているという点に注意すべきである。サルトルはデカルトを否定したのではなく、むしろ徹底化したのだとさえいいうるのである(九)。第三種の認識に対して抱かれるであろう印象――第三種の認識は不可能ではないか――は、スピノザが現実存在に必然性という性質を結びつけたことに起因していると考えることができるが、スピノザのこうした考えは、常識から逸脱していることはもとより、哲学史の主流からも完全に逸脱している。ただし、主流とまったく無関係というのではない。それが、スピノザの哲学史上の特異な位置である。

デカルトやライプニッツに反して、スピノザは現実存在を必然的として認識することを真とするような形而上学を構築したのだが、その形而上学にしたがえば、現実存在を偶然的と理解するような認識は主観的であるにすぎず、したがってまた虚偽を含んでいることになる。個物の現実存在を持続するものとしてとらえる第一種の認識は、「虚偽の唯一の原因」(II41pr.)なのである。ただし、事物を第三種の認識によって理解することによって第一種の認識が消失してしまうわけではない。第一種の認識すなわち表象は、真の認識によってけっしてとりのぞくことができないのである。例えば、われわれは太陽を二百フィート先にあると表象するがこの認識は虚偽である。しかし、太陽までの距離にかんして真の認識を得たとしても、やはりわれわれは太陽を二百フィート先に表象するであろう。真の認識によって除去されたのは表象の含む虚偽であって表象そのものではない(IV1sc.)。同様に、個物を必然的なものとして認識することによって、その偶然性が視界から消滅するというのではない。われわれは依然として個物を偶然的なものとして表象し続けるであろう。ただ、それが真でないと知っているだけである。したがって、第三種の認識を得るには、個物の現実存在を偶然的とみなす認識を捨てる必要はない。そんなことこそ不可能であるとスピノザ自身がいっているのである。すると、かりにスピノザが正

しかったとしても、デカルトやライプニッツの偶然性の哲学は強固な世界像として生き延びることになる。

スピノザの哲学は、現実存在の偶然性という強固な信念は温存させたまま、そのような信念がじつは虚偽であるといいうるような視点から語られている。このような視点こそが、哲学史におけるスピノザの位置を極めて特異なものとしていると考えられるのである。

【凡例】

スピノザ『エチカ』のテキスト参照箇所は以下の略号によって表示する。典拠はゲプハルト版全集第二巻。

GEBHARDT, *SPINOZA OPERA*, HEIDERBERG, 1925, vol.II

definitio: D　propositio: pr　demonstratio: dem.　scholium: sc.

注

（一）スピノザの「共通概念」の理論は、「普遍」の理論として解釈されなければならない。HASELOT [1950]ならびに柴田［二〇〇五］を参照。

（二）Cf. LEIBNIZ [1714] p.612-614

（三）Cf. DESCARTES [1644] pp.22-23

（四）Cf. BROCHARD [1954] pp. 371-383

（五）スピノザも「神から産出された諸事物の本質は現実存在を含まない」（I24pr.）と明言している。しかし、ジルソンが明確に述べているように「このテーゼを受け入れることは、スピノザにおいては、有限な存在者の構造そのもののなかに本質と現

実存在の実在的区別を認めることにはならない」。Cf. GILSON[1994] p. 164. この点はロイドからも指摘されている。「スピノザにとって、有限な諸事物の本質は現実存在と区別されるものである。……しかし、にもかかわらず、本質が現実存在から分離されないような方法がある」。Cf. LLOYD [1994] p. 110

（六）同じ解釈は、MATHERON[1994]p.35

（七）「われわれの考えでは、第三種の認識という考えによって、スピノザはある計画、ある願望へ応えているだけである。もっとも、この計画は実現されないし、この願望は満足させられない」。Cf. ALQUIE[1981]p. 236.

（八）Cf. SARTRE [1954] pp. 17-19

（九）Cf. SARTRE [1947]

文献

ALQUIE, F. [1981] *Le Rationalisme de Spinoza*, PUF

BROCHARD, V.[1954] *Etudes de philosophie ancienne et de philosophie moderne*, nouvelle éd., VRIN

DESCARTES [1644] *Principia philosophiae, OEUVRES DE DESCARTES*, AT-VIII

GILSON, E. [1994] *L' être et l'essence*, troisième éd., VRIN,

HASELOT, F.S. [1950] "Spinoza and the status of universals," *The Philosophical Review*, vol. 59

LEIBNIZ [1714] *La Monadologie,　DIE PHILOSOPHISCHEN SCHRIFTEN*, GERHARDT-VI

LLOYD, G. [1994] *Part of Nature self-knowledge in Spinoza's Ethics*, CORNELL UP

MATHERON, A. [1994] "La vie éternelle et le corps selon Spinoza," *Revue Philosophique*, n⁰1

SARTRE, J.=P. [1954] *L'existentialisme est un humanisme*, NAGEL

——[1947] "Liberté cartesienne," *Situations I*, GALLIMARD

柴田健志［二〇〇五］「スピノザにおける「共通概念」と普遍の位相」『西日本哲学年報』第三号